

埼玉学園大学・川口短期大学 機関リポジトリ

<資料紹介> 現代の家族関係と愛着に関する文献研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-06-27 キーワード (Ja): キーワード (En): attachment theory, family system and caregiving system, divorce, attachment and trauma, risk and resilience 作成者: 金谷, 有子, 赤津, 純子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/280

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



資料紹介

現代の家族関係と愛着に関する文献研究

A Review of Studies on Family Relationships and Attachment

金 谷 有 子・赤 津 純 子

KANAYA, Yuko AKATSU, Junko

はじめに

本研究は現代の家族関係と愛着に関する文献研究である。金谷（2009；2013；2014）は愛着理論の実証研究と愛着理論に基づいた臨床研究を考察してきた。本研究ではこれまで焦点化して考察してこなかった家族にまつわる問題を愛着や愛着理論の観点から探究していきたい。

本研究では、最初に現代家族の変容とその特徴を概観する。次に家族と愛着に関連した内外の文献を4つの観点からレビューしていく。アタッチメント理論と養育システム、アタッチメント理論から捉えた家族の危機（離婚、未組織型の愛着、DV）、アタッチメントとトラウマ、親・家族・愛着に焦点を当てた介入研究についてである。最後に今後の課題を検討していく。

1. 現代日本の家族の変容とその特徴：戦後の日本の家族の変遷

機械化される以前の農業中心の時代には、母親である女性の多くは労働力として家業を支えていた。その後、第一次世界大戦後の好景気に伴う産業化の進展により職場と家庭の分離が始まると、母親は専業主婦として家事と育児に従事するようになった。父親は俸給生活者、母親は専業主婦として2、3人の子どもを養う性役割分業に基づく家族の形態は第二次世界大戦終結以降確固としたものになった。この戦後の近代家族を、落合（1994）は「家族の戦後体制」、山田（2005）は「戦後家族モデル」と名付けている。

落合は近代家族の概念を①家内領域と公共領域との分離②家族構成員相互の強い情緒的関係③子ども中心主義④男は公共領域・女は家内領域という性別分業⑤家族の集団化の強化⑥社交の衰退とプライバシーの成立⑦非親族の排除（⑧核家族）という特徴にまとめている。そして、女性の主婦役割からの脱却、再生産平等主義（押しなべて人は結婚し、家庭には2、3人の子どもがいる）の崩壊、人口学的移行期世代（多産少死で就労世代の多い人口構造）の衰退という家族の戦後体制の3条件がすべて失われたオイルショック後の1975年がこの近代家族の変曲点であると述べている。山田（2005）は、さらに、この1975年以降に近代家族を維持するための修正（妻のパート労働者化、晩婚化等）が起り、バブル崩壊後の1998年に解体期が訪れたとしている。

1970年代半ばという時期は、専業主婦が主流であった。その後共働き夫婦が増大し、1990年代前半にその数は逆転している（内閣府2013）。また若い世代の女性の晩婚化や受胎調節が一般化して1950年代半ば以降安定していた合計特殊出生率が低下したことによる少子高齢化が始まった時期である（厚生労働省2012）。1990年代末という時期は、児童虐待相談件数、妊娠先行型結婚、少年凶悪犯罪数、離婚数等の増大といった家族をめぐる問題が顕著になってきた時期である。

大家族で生活していた時代には、母親だけではなく、祖父母やきょうだいも幼い子どもの世話をしていた。その時代には母親の子育てについての精神的な負担は少なく、母親の意識としては、子どもは自

キーワード：アタッチメント理論、家族システムと養育システム、離婚、愛着とトラウマ、リスクとレジリエンス

Key words：attachment theory, family system and caregiving system, divorce, attachment and trauma, risk and resilience

然に、勝手に育ってしまう存在だった。

近代家族では、子育ては母親の役割であり、この時代の母親の関心は家庭に向けられていた。1955年頃から1975年頃までの安定期には、母親は子どもの教育に熱心に取り組んだ。1970年代の研究（東洋他1981）では母親の教育責任については、親が高学歴でホワイトカラーであるなどの高い階層ほど大きく認識しているという傾向が見られている。

1980年代には、結婚して仕事を辞めた高学歴の専業主婦の母子癒着問題が多く指摘されるようになった。夫が忙しく働く中、彼女らにとっては優秀な子どもを育てることが自己実現の手段であり、子どもの教育が生き甲斐であった。（橘1996）。

経済の停滞期となった1990年代からは、子どもの学力の二極化が始まった。富裕高学歴の親は、教育に熱心で子どもへの多額の教育費を十分に支払う能力がある一方、低所得層の親は、日々の生活に追われ、教育に無関心で、教育への出費を抑えざるを得ない状況であることが主な原因であると考えられた。

この時代の母親の意識について見てみると、1997年の調査（柏木・永久1999）では、年齢層が若く、有職で子どもの少ない層ほど母親や妻としてではなく個人として生きたいという願望が強いことが示され、さらに、2001年の調査（柏木・平山2005）では、フルタイム就業の母親は個人としての自己のありように満足していることが示されている。富裕層の母親は、子どもの教育に対する関心は強いが、教育を塾などの外部に委託してしまいがちで家庭教育・家庭独自のしつけを等閑にする。また、家庭や子どもではなく自分自身のことに興味があり、子育てに対しては負担感を抱いている。子どもへの直接的な関わりや興味関心が希薄で子どもに十分に向き合っていないという点では、低所得層の無関心な親と違いがない状況である。今日、親の子どもに対する意識、家庭力の衰退はさらに進んでいる。

2. アタッチメント理論と養育システム

臨床家として愛着理論を概説し、さらに愛着研究の関係性の発達の解明と臨床への貢献について考察しているのがデイビット・ウォーリン（2011）である。愛着理論を構築したジョン・ボウルビィ、乳幼

児の愛着パターンの測定法（ストレンジ・シチュエーション）を開発したメアリー・エインズワース、大人の表象レベルの愛着を評価する方法（成人愛着面接：AAI）を開発したメアリー・メイン、愛着パターンの世代間伝達に関する研究からメンタライジング（反省）様式、情動調節、間主観性の研究および臨床を行っているピーター・フォナギーを紹介している。さらに愛着関係と自己の発達、愛着体験の多様性を述べ、愛着理論から臨床実践へ進める上でメンタライゼーションとマインドフルネスの概念を説明している。

養育システムに焦点化して研究することによって見えてくるものを検討しているのはGeorge & Solomon（2008）である。ボウルビィの内的作業モデルの概念を利用し、親自身の養育の表象の評価を検討した研究を概説している。養育の表象を測定している文献、用いられた査定法・測度、対象の年齢グループ、結果をまとめている（pp842-843）。里親養育を受けている乳幼児と里親対象に行われた研究では親のマインド・マインディネス（子どもが自律的心を持っていることを考えることができる能力）を調べている。安定愛着の母親は受容と情緒的安定が高いなどの結果が出ている。4、5歳児とその母親の洞察力や子どもの動機への洞察、子どもについての新しい情報を受け入れる柔軟性等を調べた研究では安定愛着と不安定愛着の違いが示されている。乳児とその母親を対象に親発達面接を用いた研究では、親の内省機能と母親自身と子どもの心的状態への理解と調整の力を調べている。組織化された愛着を持つ母親は未解決型愛着の母親より高い内省機能を示したという。親の表象、メンタライジングそして愛着分類を用いた研究は養育への重要な視座を与えてくれるだろう。今後はさらに不安定愛着との関連で養育の表象の個人差についての研究と理論が必要である。

「子どもに対する作業モデルインタビュー」はアタッチメント理論とその研究から導き出された親の認識を探る方法である。乳児の生育歴の事実よりも、親がその子どもどのような体験してきたかが質問の焦点である。乳児との関係をより多く語ってもらうことに焦点があるので、母親の語る赤ん坊について

の物語が重要となるとジナーは述べている(2011, p10)。ジナーは母親の語りから、適応的な面や洞察力、自身の体験を振り返る能力、メンタライズする力を知り、治療を進めている。

3. アタッチメント理論から捉えた家族の危機：離婚、未組織型の愛着、DV

愛着理論は離婚に焦点化して研究してはいないが、離婚は愛着の絆の崩壊・終焉と捉えるならば愛着理論と離婚研究は関連づけが可能である。Bowlby(1969;1973;1977;1980)は、愛着対象との分離や別れ、愛着の傷つき、脱愛着を論じている。愛着の生物学的機能は、保護、生存であり、ヒトは不安や困難な状況におかれると愛着対象への近接の維持と接近行動によって安心を確保しようとするのである。このような機能をもつ愛着の絆を壊す離婚は非常に重大な人生移行をもたらすものとなる。

Feeney & Monin (2008)は、離婚によるカップルへの情動面での影響や離婚による子どもの安定愛着への影響についてまとめている。離婚後の子どもと両親との関係、心身の健康、関係性の機能などの研究、離婚家庭の乳幼児の安全感と不安定愛着の研究、母親の父親への態度の影響についての研究などの結果を考察している。別れが愛着の安全性のリスク要因になるかどうかは、不安定性を強める逆境状況にあるのか、あるいは安全を促進し保護する状況にあるのかによるといえる。離婚家庭の安全な愛着について男性より女性に影響があるという性差が見いだされている。これは最初の愛着対象から受けた養育の質の違いによるのではないかと解釈されている。

Feeney & Monin (2008)は、離婚は離婚前の愛着関係と離婚後の関係性へつながる崩壊した愛着の過程であるとまとめている。このような離婚の過程における個人差について愛着理論から検討している研究は少ない。様々な異なる愛着のタイプのカップル(例えば、安定型と安定型、安定型と回避型、安定型と不安型、不安型と回避型、不安型と不安型、回避型と回避型)の離婚のダイナミックスを記述し、臨床的介入の一般的ガイドラインを提示している多くの愛着研究や臨床的観察がある。これらは実証的

に検証されていく必要がある。

アリエッタ・スレイド(2011)は愛着理論の実証研究に結びつけて精神分析的心理療法を行っている臨床家である。子どもにとって愛着は、自分の経験によって規定され、親の愛着経験の歴史によって形成されるものであると述べている(フォナギー, 2008)。彼女(2011)は愛着分類の妥当性を考察しながら治療を進めている。愛着表象が未組織・未解決型は最も病理性が高い。その原因はトラウマ的な経験のため、心理化や内省機能が働かないからと考えられている。実際の母子相互作用の場面を紹介しながら、未組織・未解決型の理解と治療について検討している。

DVとは配偶者(元配偶者も含む)や親密な関係にあるパートナー間で起こる暴力であるが、近年は特殊な夫婦間に起こる稀な暴力というよりは一般的で誰にでも起こり得る暴力と言われる。高畠(2007)は、DV被害女性や両親間DVの目撃者の子どもにアタッチメント理論を適用して治療を試みている。その理論的枠組みとして内的作業モデル(Bowlby, 1969)を活用している。被害者たちの回復のための支援事例を通して説明している。

4. アタッチメントとトラウマ

Kobakら(2008)は、アタッチメント理論や研究がトラウマ体験への対処や解決に役立つと述べている。アタッチメント関連性トラウマには4タイプある。予期せぬ別離によるアタッチメント対象の利用可能性を失う崩壊、親による虐待やアタッチメント対象が危険の源となる状況、アタッチメントの傷つき(見捨てられ)、アタッチメント対象との死別である。彼らはアタッチメント関連性トラウマの解決を干渉する過程を考察している。成人愛着面接における「未解決の喪失とトラウマ」すなわちアタッチメント関連性トラウマやPTSDの臨床研究をレビューし、その共通性を検討している。アタッチメント理論によると、対人関係の文脈が、トラウマ的な出来事を解決する能力を促進したり妨げたりする。そこでアタッチメント関連性トラウマの解決を促進する要因を明確にしていこうとしている。例えばストレス制御、トラウマ的な出来事に伴う極度の恐怖と

無力感のマネジメントである。また安定したアタッチメント関係は、トラウマ性の記憶に結びつく極度の恐怖への対処にとって不可欠な役割を果たす。早期のアタッチメントトラウマは、後のトラウマに比べて長期的な影響をもたらすといわれる。またアタッチメント関連性トラウマは解決が困難な長期にわたる無秩序型のパターンを生むと考えられる。アタッチメントとPTSDのメカニズムについての検証をする必要がある。

リーバーマンらは、トラウマという視点を用いることでアタッチメント研究の文献で見出される以上のもっと重篤な無秩序型の子どもと親との関係性形成の経路を臨床家は同定できるだろうと述べている（ブッシュ&リーバーマン, 2011; Leiberman & Amaya-Jackson, 2005）。彼らはトラウマを負った子どものアセスメントと治療は、アタッチメントとトラウマの二重の枠組みを用いて行われるべきであると提唱している。

アタッチメントとトラウマが込み入った結びつき方をしている状況の代表的なものとしてはDVがあげられる。子どもは危険から保護されるために養育者を探し求める生物としての傾向がある（Bowlby, 1969）が、保護してくれるはずの養育者が恐怖の源だとすると子どもはどうしてよいかわからないだろう。養育者の無視や非応答、脅しといった応答性は無秩序型のアタッチメントの強力な危険因子といわれている。不適切な養育は無秩序型アタッチメントと直接結びついているという報告もある。またDV被害女性は自分の子どもを虐待する危険性が高いという報告もある。

5. 親、家族、愛着に焦点を当てた介入研究

トムリソン（2009）は、傷ついた子どもへのケアに関して、リスクとレジリエンスという視座をもって考察している。子どもへの不適切なかかわりに関連する長期的な防御推進要因としては、養育歴の良好さ、夫婦間の支え合いの望ましい状態、ユーモアがあること、知的能力の高さ、雇用されていることを挙げている。リスク要因としては、病気、傷害、夫婦間の不和、失業、その他の生活上のストレスを示し、脆弱性の高い親に影響を与え虐待やネグレ

クトの確率を高めると述べている（p113）。家族の生活とストレス、例えば、長期の経済的な困窮、失業、ひとり親世帯、葛藤状態、暴力、別居、離婚の可能性、子どもの数が多いなどはリスク要因になり、家族や夫婦間の調和、家族の結びつき、肯定的で思いやりのある家族のやりとりなどは防御推進要因となる。家族のソーシャルサポートのリスク要因としては、他者への過剰な依存、孤立、他者からのサポートがないこと、夫婦間や対人関係の不調和などが挙げられている。家族や友人との情緒的な親密さ、家族や友人によるサポートネットワークの存在、夫婦間の友好的支え合いなどは防御推進要因となる。今後の課題として、リスクの高い状態にある家族による不適切なかかわりを予防するため愛着関係を視座に入れた早期介入やエビデンスに基づいた予防的および治療的介入の研究を進めていくことであると述べている。

Berlin（2005）は早期のアタッチメントを促進する14の介入研究について、親の内的作業モデル、親の養育の感受性、アタッチメントの測定、治療的介入などの側面からレビューし考察を行っている。初めて母親になる低所得の女性とその子どもの環境面の向上をはかるプログラムは、看護師が家庭訪問をして、カウンセリング、家族計画、育児に関する教育、栄養、物質乱用についての情報を提供する包括的で長期的な介入である（Olds, 2005）。Sladeら（2005）が行っているのは、研究者と臨床家が協働して若い母親とその赤ちゃんの愛着や心身の健康を改善する家庭訪問プログラムMinding the Baby（MTB）である。これは親の内省機能を促進することを目指すプログラムである。

Greenberg（2005）は、アタッチメントに焦点を当てた介入の成果を評価しながら、さらに大きな検討課題としてアタッチメント、ストレス、家庭の健康、ライフコース、そして社会的政策との間の関係性についてであると指摘している。

Johnson（2008a）によると結婚ストレスのパターンをアタッチメント理論で説明する試みが増えているという。彼はカップルと家族のセラピーをアタッチメントの視点から研究している（Johnson, 2008b）。個人の機能、成長、回復力という点で、安

全な避難場所や安全基地としてのアタッチメントの意義が明らかになってきている。

今後の課題

本研究で扱ったアタッチメント関連の文献は欧米での研究が中心であった。現代日本においても虐待やネグレクトのみならずアタッチメントが関係している様々な問題が生じていると考えられる。今後の課題としては、我が国におけるリスク家庭のアタッチメント理論からの考察と現実問題の解決の方法を探ることである。さらに膨大なアタッチメント研究の文献を精査したいと考える。

<付記>本研究は埼玉学園大学の共同研究補助（平成25年度）を受けて行われたものである。

引用・参考文献

- 東洋・柏木恵子・R.D.ヘス 1981 母親の態度・行動と子どもの知的発達：日米比較研究 東京大学出版会
- Berlin, L.J. (2005). Intervention to enhance early attachments: The state of the field today. In Lisa J. Berlin Yair Zip, Lisa Amaya-Jackson, & Mark T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachments; Theory, research, intervention, and policy*. 3-33. The Guilford Press.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment, vol.1 of Attachment and loss* (second edition, 1982). London: Hogarth Press; New York: Basic Books; Harmondsworth: Penguin (1971).
- Bowlby, J. (1973). *Separation: anxiety and anger, vol.2 of Attachment and loss* London: Hogarth Press; New York: Basic Books; Harmondsworth: Penguin (1975).
- Bowlby, J. (1977). The making and breaking of affectional bonds, *British Journal of Psychiatry*, 130: 201-10 and 421-31; reprinted 1979, New York: Methuen; London: Tavistock.
- Bowlby, J. (1980). *Loss: sadness and depression, vol.3 of Attachment and loss*. New York: Basic Books
- ブッシュ, E.L. リーバーマン, A.F. (2011). アタッチメントとトラウマ—家庭内暴力にさらされた幼い子どもを治療するための統合的アプローチ ダビット・オッペンハイム＋ドグラス・F・ゴール

- ドスミス (編) 数井みゆき、北川恵、工藤晋平、青木豊 (訳) (2011). アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床 165 - 204 ミネルヴァ書房
- Feeney, B.C. & Monin, J.K. (2008). An attachment-theoretical perspective on divorce. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. 934-957. New York: Guilford Press.
- フォナギー, P. (著) 遠藤利彦・北山修 (監訳) (2008). 愛着理論と精神分析 誠信書房
- George, C. & Solomon, J. (2008). The caregiving system: Behavioral systems approach to parenting. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. 833-856. New York: Guilford Press.
- Greenberg, M.T. (2005). Enhancing early attachments: Synthesis and recommendations for research, practice, and policy. In Yair Zip, Lisa Amaya-Jackson, & Mark T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachments; Theory, research, intervention, and policy*. 327-343. The Guilford Press.
- Johnson, S.M. (2008a). アタッチメント理論—カップルの関係性を癒すための指針—W・ステイヴン・ロールズ＋J.A.シンプソン (編) 遠藤利彦他 (監訳) 成人のアタッチメント：理論・研究・臨床 330 - 328 - 348 北大路書房
- Johnson, S.M. (2008b). Couple and family therapy: An attachment perspective. In Cassidy, J. & Shaver, P.R. (Eds.), *Handbook of attachment: Theory, research, and clinical applications*. 811-829. New York: Guilford Press.
- 金谷有子 (2009). 愛着理論の縦断研究とその臨床応用への寄与について 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 第9号 185-196
- 金谷有子 (2013). アタッチメントの安定・不安定とは何か—アタッチメント理論に基づいた研究の成果と臨床実践から探る— 埼玉学園大学紀要 人間学部篇 第13号
- 金谷有子 (2014). 発生する<身体>—家族コミュニケーションと情動発達 澤江幸則・川田学・鈴木智子 (編) 発達支援のユニバーサルデザイン 第3巻 <身体>に関する発達支援のユニバーサルデザイン 70-79
- 柏木恵子・永久ひさ子 (1999). 女性における子どもの価値：今、なぜ子どもを産むか 教育心理学研究 Vol.47 P170 - 179
- 柏木恵子・平山順子 (2005). 女性の生き方満足度を

- 規定する心理的要因：今、女性の“しあわせ”とは？ 発達研究 Vol.19 P97 - 112
- Kobak, R., Cassidy, J., & Ziv, Y. (2008). アタッチメント関連性トラウマと心的外傷後ストレス障害 W・スティーヴン・ロールズ+J.A.シンプソン（編）遠藤利彦他（監訳）成人のアタッチメント：理論・研究・臨床 349 - 366 北大路書房
- 厚生労働省編（2012）. 平成24年人口動態統計（確定数）の概況 厚生労働省
- Lieberman, A.F. & Amaya-Jackson, L. (2005). Reciprocal influences of attachment and trauma: Using a dual lens in the assessment and treatment of infants, toddlers, and preschoolers. In Lisa J. Berlin, Yair Zip, Lisa Amaya-Jackson, & Mark T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachments; Theory, research, intervention, and policy*. 100-124. The Guilford Press.
- 内閣府男女共同参画局編（2013）. 男女共同参画白書（平成25年度版） 新高速印刷
- 落合恵美子（1994）. 21世紀家族へ：家族の戦後体制の見かた・超えかた 有斐閣
- Olds, D.L. (2005). The Nurse-Family Partnership: Foundations in attachment theory and epidemiology. In Lisa J. Berlin, Yair Zip, Lisa Amaya-Jackson, & Mark T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachments; Theory, research, intervention, and policy*. 217-249. The Guilford Press.
- Slade, A., Sadler, L. and Mayes, L. (2005). Minding the Baby: Enhancing parental reflective functioning in a Nursing/Mental Health Home Visiting Program. In Lisa J. Berlin, Yair Zip, Lisa Amaya-Jackson, & Mark T. Greenberg (Eds.), *Enhancing early attachments; Theory, research, intervention, and policy*. 152-177. The Guilford Press.
- スレイド, A. (2011). 未組織型の母親と未組織型の子ども—感情の調整が不全な状態で心理化と治療によってもたらされる変化— ダビット・オッペンハイム+ドグラス・F・ゴールドスミス（編）数井みゆき、北川恵、工藤晋平、青木豊（訳）(2011). アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床 276 - 309 ミネルヴァ書房
- 橘由子（1996）. アダルトチルドレン・マザー 学陽書房
- 高島克子（2007）. ドメスティック・バイオレンス被害者へのアタッチメント理論によるサポート 数井みゆき・遠藤利彦（編著）アタッチメントと臨床領域 234 - 262 ミネルヴァ書房
- トムリソン, パーバラ（2009）. 子どもへの不適切なかかわり—リスクと防御推進要因の視座— フレイザー, マーク・W.（編著）門永朋子・岩間伸之・山縣文治（訳）(2009). 子どものリスクとレジリエンス—子どもの力を活かす援助— 103 - 153 ミネルヴァ書房
- ウォーリン, デイビッド・J.（著）津島豊美（訳）(2011). 愛着と精神療法 星和書店
- 山田昌弘（2005）. 迷走する家族：戦後家族モデルの形成と解体 有斐閣
- ジナー, C.H. (2011). 母子の関係性を形成するための治療計画—子どもに対する作業モデルインタビューを臨床的に応用して— ダビット・オッペンハイム+ドグラス・F・ゴールドスミス（編）数井みゆき、北川恵、工藤晋平、青木豊（訳）(2011). アタッチメントを応用した養育者と子どもの臨床 3 - 38 ミネルヴァ書房